

予防医学を志向したリスクマネジメント学の萌芽

酒井亮二(JSRMPM 理事長)

ご案内のように本会の名称には予防医学とリスクマネジメントがキーワードになっています。今日の予防医学は傷病の発生予防と疾患憎悪の予防という 2 つの観点から構成されるに至っています。前者は地域と社会を対象にし、後者は診療の場を対象にしています。このような背景から本会が対象とする守備範囲は地域社会および診療の両面であり、本会の目標はそこでの疾患の予防活動を通じて、個人と集団の健康と安全を確保することにあると考えます。

他方、リスクマネジメント学はこれまで主として経済学や工学など医学以外のいくつかの分野で発展してきました。医学関連分野では環境リスクマネジメントというものが近年ようやく欧米の環境研究者の間で話題となり、国連組織の指導の下に日本でも環境リスクマネジメント活動が産官民の間で急速に普及したばかりです。米国での環境リスクマネジメントの勃興は、日々増大する環境リスクに対して、国家予算が際限なく拡大する傾向にあり、諸対策に対する科学的な検討の必要性が認められました。ここに大統領、議会および科学アカデミーが一体となって過去 10 年以上にわたって検討されるに至りました。したがって、米国の環境リスクマネジメント学は経済効果分析が中心的な課題になったと考えられます。

さて、本会では、健康と生存にかかわる障害を広くリスクという観点で考える視点を有しています。リスクという言葉自体は少なくとも半世紀以上にわたる長い思索があり、今日の世界保健機構(WHO)での定義(=好ましからざる事象の起きる確率)に至りました。この定義を採用すると、疾患をリスクとして検討することにより、数値分析による詳細な実証科学が可能になります。これによって、これまでにない明快な学問的な指針を得ることができます。リスクマネジメントは古くハムラビ法典の中に記載があり、船舶事故による積荷の保険制度が存在しています。上記に見られますように、現代のリスクマネジメントは確率論と情報学を基盤として、数値科学の世界で実証するという質的変貌を遂げております。危険を完全に回避することはできないが、どうすれば最善のリスク軽減対策が得られるかを現実のものにするには、実際のデータとその解析という実証的な行為が大前提にあるというのが今日のリスクマネジメント学と考えられます。

なお、「マネジメント」を「管理」という日本語に訳するとかなりの誤解が生じてしまいます。Health administration の訳が健康管理であるように、英語で管理という言葉はむしろ administration であり、また administrator を「管理人」、manager を「支配人」という慣用語からすると、risk management での management は「経営、経略」という概念に近いと思われます。しかし、完全に日本語との対応ができない部分もあり、カタカナの使用が今日的であろうと思われます。このような点から、リスクマネジメントは単なる「リスク管理術」

や「経済効率の良い予防対策」だけでなく、「人間がリスクとどのようにうまく付き合うか」という人間生存のあり方に係わっており、従って哲学や倫理といった根本命題をもつ広い裾野のある世界であると認められます。また、予防医学での対象は人間というの代替のない存在であり、機械や経済における代替可能な事象を対象にする安全工学や経営学でのリスクマネジメントとの間には共通点と多くの相違点があります。以上のように、予防医学のリスクマネジメントは学問的に未知の膨大な真理が潜んでいる人類の古くて新しい課題であると思います。

ここで20世紀の人類の科学史におけるリスクマネジメントの代表的な例として、人工衛星が他の天体に至る過程を考えてみますと、その遠大なタスクを無事完了するには、おびただしい物理化学的および人的なリスクに対する予防と回復の対策がさまざまに開発されたことが伺えます。原子核エネルギーの安全使用など20世紀の科学技術は、かつて経験したことがないほど高い水準でリスクマネジメントを達成しました。これは、人類がこの分野で極めて高い能力を有する生き物であることの証明でもあります。他方、技術革新の飛躍的進歩とそれに伴う社会のグローバル化が生じ、地球環境問題、地域医療問題、産業医学問題、災害医学、医療事故、薬害、食品衛生問題、国際保健問題、危機管理、自殺など多方面にわたる予防医学の諸問題が増加しています。しかし、その多くのものは予防可能な本質的性格を見出すことができます。

したがって、工学、政治経済学、行政学、社会学、環境科学、生態学、人類学、行動科学、情報科学、教育学、倫理学、疫学、統計学など多方面による学際共同の中から、人類がまだ手にしていない健康リスクの予防を志向したきわめて高度なリスクマネジメント学が発展すると期待されます。そして、このような学際的な視点を有する本学会がその討議の場を国内外に共有し、そこで今後長い年月をかけて討議することにより、健康リスクの予防に関する幾つかの原理と幾多の方法が開発されると期待します。近代医学の歴史から眺めると、各々の医学の専門領域が学際研究によって成長してきたように、予防医学リスクマネジメント学の成長も他の分野との広範な共同討議が必要となっています。また、これまでばらばらに行ってきた異分野での諸専門が実は人間生存を共通の基本テーマにしています。それら異分野間の共通なコミュニケーションが知の爆発的な飛躍をもたらし、今日抱えている様々な予防医学上の難問に対する高度な回答が生み出されるように期待されます。そういう意味で、将来この学会が学際組織としての性格を放棄したとき、医学研究者だけで真の意味のリスクマネジメントが確立できるかはかなり疑問であり、他の医科学と同様に学際的性質を終始貫く必要があると考えられます。

百年単位の歴史でみれば、日本予防医学リスクマネジメント学会の発足は世界における予防医学を志向したリスクマネジメント学の萌芽と一致しています。日本語という共通言語で討議する場もまた社会的には必要であり、それによって日本文化と広くリンクすることは他の言語圏でも同じ事態であり、日本語による討議の場として本会の必要性を認めます。

最後に、新しい学問と組織の誕生にはかならず付きまとう幾つもの困難な問題に対して
勇気を持って立ち向かう国内外の多くの方々の努力と支援なくして、世界最初の予防医学
リスクマネジメント学会である本会の成立はありえません。そういう点で関係者に深い
敬意をもって、本稿文の締めくくりとさせていただきます。